

塩田広重学長と「磯部検三日記」

殿崎 正明, 唐澤 信安, 志村 俊郎

日本医科大学 教育推進室 医史学教育研究会

1. はじめに

塩田広重は自らの著書『メスと鉗』(昭和38年, 桃源社)における「略歴」中で、「昭和9年8月日本医科大学理事辞任同月再任」と記述している。磯部検三は「この大学の前身たる日本医専の創立者は実に我輩である」と昭和9年に名乗り出て、2ヶ月間の激しい闘争の末、塩田は敗れた。磯部は「日本医学校」の創立者と拡大解釈させて今日に至る。塩田は苦しみに耐えた。日本医科大学の理事で学長である塩田を退任させて即就任させた経緯について磯部日記をもとに考察する。

2. 磯部検三

磯部は元々山根正次の書生で山根が警察医長時代にはその秘書を務め、山根が川上元治郎に乞われて日本医学校を創設した際には幹事として学校事務にあたった。大正5年5月日本医学専門学校文部省指定問題で4百余名が総退学を決行した責任をとり、大正6年2月に退任して4月から昭和3年2月までに4回衆議院選挙に出馬し何れも落選する。その後満州に渡り昭和8年冬に帰国し、日本医科大学の独裁主義者として知れ渡っていた塩田広重学長兼理事長に不満を持つ同窓生達と結託して「この大学の前身たる日本医専の創立者は実に我輩である」と昭和9年に名乗りを上げる。その前後の経緯を「磯部検三日記」は伝えている。

3. 「磯部検三日記」

磯部日記には、昭和9年5月前後に磯部を日本医科大学の創立者として祭り上げる密談が頻繁に磯部宅で行われていたこと、5月12日目黒雅叙園にて日本医科大学創立30周年を記念した祝賀会を開催した際に撮られた約100名からなる集合写真が見つかり、その上部に差出人を「財団法人日本医科大学創立者磯部検三」と書かれた4月18日付けの祝賀会開催案内書を読むことが出来る。6月2日には、同窓生30余名を紅葉閣に集めて日本医学校創立当時の状況を語り一同感激した事、6月21日には「日本医科大学発達史の編纂」を行う確認を行った後に、7月23日大学史概印(草稿完成)し塩田との闘争が開始され、いずれも塩田宅で同24日塩田大恚(たいい, 大いに怒る), 26日塩田を面詰極諫(面と向って諫め), 首服(罪を認める), 反省を促し, 悔謝させ, 塩田は許しを求め, 27日塩田慙悔(ざんかい, 恥じ悔い改め), 28日には塩田磯部宅にて日頃の不敬を陳謝し, 磯部は学校創設以来の心境と日頃の態度を非難し, 塩田は悉く認め謝り, 30日塩田大学で態度を一新させ, 闘争は終結となっていく。

塩田が磯部に敗れた原因は、明治45年2月の「専門学校設立願」, 「財団法人設立願」の筆頭署名がそれぞれ磯部となっている書類による。

明治45年, 日本医学校を日本医学専門学校とする際に山根は朝鮮衛生顧問として日本にいく留守中に磯部の手で磯部を筆頭名として申請が行われ, 以後日本医科大学は日本医学校を前身とし, 創立者は磯部であると拡大解釈する誤った歴史を磯部派が定着させて行く。

4. 塩田広重

塩田は浜口雄幸・鈴木貫太郎首相をはじめとする手術で有名であるが, その略歴を本学の歩みに関連させて述べると, 明治32年12月に東京帝国大学医科大学医学科を卒業, 明治34年4月済生学舎講師, 大正3年9月日本医学専門学校教授, 大正7年4月財団法人日本医学専門学校理事, 大正11年2月東京帝国大学教授, 大正15年2月日本医科大学理事・教授, 昭和3年3月日本医科大学学長, 昭和11年5月学位審査権の取得, 昭和29年11月文化功労者, 昭和35年2月日本医科大学学長を退任した日本医科大学の歴史を生き抜いた大恩人である。

5. まとめ

日本医科大学の大学案内パンフレットには昭和40年代まで「本学の沿岸をたずねると, 極めて古く, 明治37年4月磯部検三氏によって神田淡路町に日本医学校として創立された。」と誤った校史が書かれて来ていた。その背景を, 磯部検三日記をもとに考察した。